

## 抗 D 様自己抗体を保有する患者に輸血を実施した 1 症例

◎渡辺 琴乃<sup>1)</sup>、吉田 雅弥<sup>1)</sup>、西山 陽香<sup>1)</sup>、古閑 有咲<sup>1)</sup>、吉丸 希歩<sup>1)</sup>、山崎 卓<sup>1)</sup>  
熊本赤十字病院<sup>1)</sup>

【はじめに】自己抗体とは、リンパ球が自己抗原に反応し、自己組織を標的として産生された抗体のことである。自己抗体が血液型抗原に特異性を持つ場合、抗 e などの Rh 血液型に対する抗体がほとんどである。今回、抗 D 様の自己抗体を検出した患者に輸血を実施した症例を経験したので、報告する。

【症例】患者は 60 歳代男性、胸痛を主訴に当院を受診した。他院で肺癌の診断をされたが、治療を自己中断していた。当院での血液検査で貧血を認めたため、赤血球製剤 2 単位が依頼された。当院では輸血のみ実施し、貧血の原因精査や原疾患の治療においては診断元の病院に紹介することとなった。

【結果・経過】カラム凝集法による血液型検査は O 型 RhD 陽性、不規則抗体スクリーニング(LISS-IAT)は陽性であった。試験管法による血液型検査も O 型 RhD 陽性、PEG-IAT は陰性であった。不規則抗体同定検査(LISS-IAT)にて自己対照と、抗 D に完全一致する凝集を認め、酵素法においては反応が増強した。試験管法の

DAT は陽性、酸解離した上清を用いて PEG-IAT を行った結果、抗 D に完全一致した。O 型 RhD 陰性の赤血球製剤とのクロスマッチは適合であり、患者には O 型 RhD 陰性の赤血球製剤が輸血された。その後、紹介先の病院で血液型検査を行った場合、抗 D に部分凝集が認められる可能性を考え、電話連絡にて情報共有を行った。

【考察】患者は RhD 陽性であり、抗 D に完全一致した反応は自己抗体である可能性が高い。しかし、partial D やミミッキング抗体、抗 LW との区別はできなかった。現時点では RhD 陰性の赤血球製剤を選択することが、安全な輸血の実施に繋がると考えた。また、抗 D 様の自己抗体はカラム凝集法と試験管法で結果が解離した。これは、本抗体が低親和性で洗浄操作によって結合が弱くなった可能性や、抗ヒトグロブリン試薬の組成の違いなどが考えられる。

【まとめ】今回、抗 D 様の自己抗体を検出した。検査結果を総合的に考え、より安全な輸血の実施に繋げる重要性を実感した症例であった。(連絡先：096-384-2111)